

会報
43号



函館の歴史的風土を守る会会報
 No.43 H 5. 3. 1
 発行所 函館の歴史的風土を守る会
 事務局 函館市五稜郭町43-9
 五稜郭タワー株式会社内
 電話 (0138)51-4785
 印刷所 双葉印刷 電話 53-7730番

1993年2月12日、第15回函館の町並みを美しくする新春チャリティーパーティーで第10回歴風文化賞の贈呈式及び原風景の宣言をしました

函館の存在をあかし原風景として 特別史跡 五稜郭跡



《原風景》

＊特別史跡 五稜郭跡

江戸時代末期、日本の北辺警備に重要な位置を占めた「五稜郭」は、往時を物語る景観を今日に伝え、多くの人々に愛され、親しまれている原風景である。
 大正二年（一九一三）に五稜郭公園として市民に開放され、昭和二七年（一九五二）に道内で唯一の特別

史跡に指定された。郭内には、当時の建物の一部や兵糧庫等がある。また、お花見、五稜郭祭り、運動会、市民創作の野外劇、冬祭りなど一年を通じて人々のオアシスでもあり、国内、外の人たちにもこの原風景が注目されている。
 この優れて美しい景観と歴史性こそ、函館の原風景に値するものとして、ここに宣言します。

第10回歴風文化賞 保存建築物 3件
再生保存建築物 1件

〈保存建築物〉

← 本 谷 邸



函館市赤川1丁目15-21 本谷 耕一 様

この建物は、大正7年に建築された総建坪50坪の住宅建築である。屋根はかや葺きであったが、20年前に防火のためカラー瓦型鉄板葺きに葺き替え、開口部は防寒のためアルミサッシに替えたが、内部の構造は昔のまま、梁は太く柱には重量感があり楔止めの仕口の構造は、日本の伝統的な建築様式を伝える。建物の前には倉があったが、道路拡張のため取り壊された。赤川水源地向かう道路に面し、新築住宅の多い赤川地区の中に、威厳と歴史性を持つ民家として潤いとやすらぎを与えています。長年に亘る保存への努力に謹んで敬意を表します。

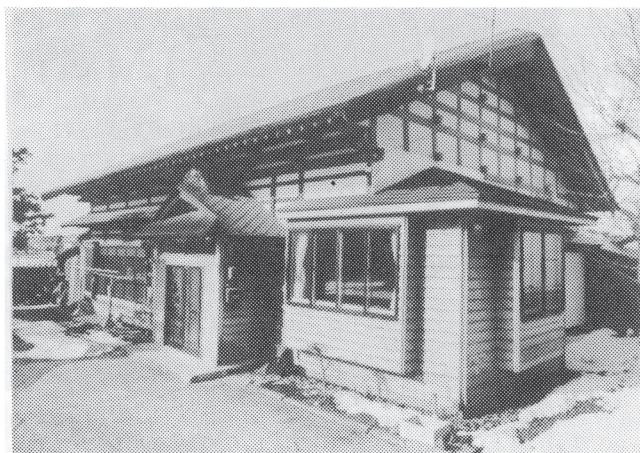
〈保存建築物〉

菊 谷 邸 →

函館市神山1丁目24-3 菊谷 兼良 様

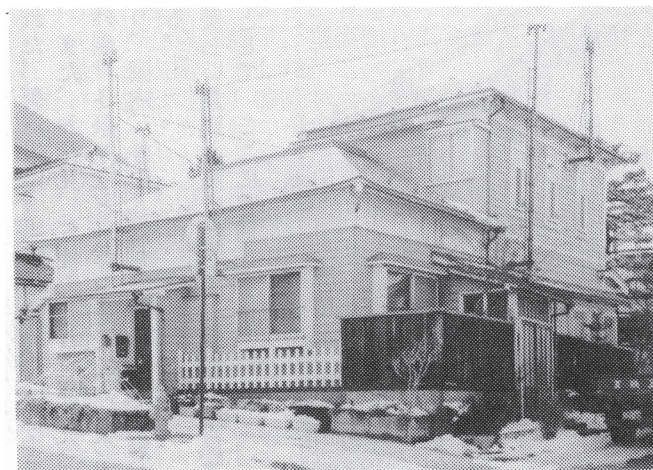
この建物は、大正13年に建築された。民家では珍しいベタ基礎で、昭和43年の十勝沖地震にもビクともしない、がっちりとした純和風建築である。屋根は桁葺きであったが、現在はその桁葺きの上に鉄板を葺いている。又、内部と開口部は防寒のため、又、外部の一部に手を加えているが、建築当時の姿を十分残している。最近宅地造成・新築住宅の建設が著しい神山地区の中に、潤いとやすらぎを与えています。

長年に亘る保存への努力に謹んで敬意を表します。



〈保存建築物〉

← 石 田 邸



函館市元町15-24 石田 正己 様

この建物は、木造和洋折衷様式で大正13年に専用住宅として建築された。昭和29年洞爺丸台風後にトタン屋根をふき替え、昭和43年十勝沖地震で内部の壁が破損し修理。又、窓枠がアルミサッシに変わっているが、往時の雰囲気をも十分に残した現建物で、この地区の町並みに潤いを与えています。

長年に亘る保存への努力に謹んで敬意を表します。



〈再生保存建築物〉
← 生田ガラス館・函館

函館市大町1-33 生田スタンドグラス
代表 生田 哲 様

この建物は、明治42年函館の特徴的な建築様式で、上下和洋折衷様式で建てられた住宅建築である。長年住居として使用されていたが、この度スタンドグラス工房として用途変更された。建物のかなりの部分を一度解体し傷みの大きな部材を取り替え建て直した。屋根はトタン葺きであったが、周囲とのバランスを考え瓦葺きに替え壁面の色も創建当時を十分考慮し再生された。基壇に面し歴史的町並み保存の推進に与えた影響は大きくその努力に謹んで敬意を表します。

歴史的風土形成に寄与した団体として

亀田川を美しくする会 様 →

同会は平成元年10月27日発足、函館市の中心を流れる亀田川川沿の19町会が、亀田川を市民に親しめる場所とするため(1)啓蒙と広報活動、(2)研究と討議、(3)清掃活動、(4)実践者の表彰等の事業を行っております。環境保全が求められる中、市の水資源のシンボルである亀田川に対し深い愛情をもって、毎年大森浜の河口から神山町までの川岸で清掃奉仕を行い、周辺環境整備に努めてこられました。亀田川一帯を観光都市にふさわしい、きれいな川にと、運動をすすめる皆さんの活動に、心から敬意を表します。



亀田川清掃風景

歴風文化賞をうけて

—— ステンドグラスの創作の場として ——

生田ガラス館・函館 生 田 哲

旧函館区公会堂から海に向かってほどよい勾配である「基坂」は、石敷の広い道路と、歩道に沿って誇らしげに立っている街路樹により、凛々しい雰囲気を持った坂です。その基坂に面して息をこらしているかのような明治の古家「旧植木家」（市の伝統的建造物指定）。これが私とこの家との出会いでした。その家の前に初めて立った時、何と空気がすがすがしく清らかに感じた事でしょう！ 正面に建つ旧公会堂やレンガ造りの旧英国領事館の方へ目をやれば、緑の木々のかたに函館山の雄姿が飛び込んで来ました。その時私はこのすばらしい土地を私のステンドグラスで染めてみたい！ 今まで以上に良い作品が出来るに違いない！ という創作意欲がわき上がってきました。「ステンドグラスの街・函館」にしたいと考えたのです。

ステンドグラスの制作を通じ、多くの建築家の方々と接し、建築設計に大変な興味を持っていた私には、塗装の劣化や下見板の破損・柱の老朽化の激しいあの朽ちた古家を、最新の技術を駆使し、甦らせた後の今

日の晴れ姿を想像する事は容易でした。建物とは周りの町並みに融け込み、環境と同化している事はその土地の風土を守る上で大切だと確信していましたので、外観は修復・保存により一層努めました。一方内部は出来る限り機能的にし、入口のエッチングガラス扉を開け一歩足を踏み入れると啞然とする程スッキリとする印象を持っていただけようまとめました。地下を制作工房、1階をガラス工芸品の店舗とし、イタリア・フランス・スウェーデンなど海外から自分の目で買い集めたガラス製品・工芸品などを陳列したりしています。こう言った事が少しでもガラス工芸の普及の一助になればと思っています。

最後になりましたが、歴風文化賞という権威ある賞をいただき本当に有難うございました。歴史ある建物を多く残された函館の方々に私のコンセプトが認められ本当に喜んでいきます。ここに謹んで心からお礼を申し上げます。
(ステンドグラス作家)

10年間にわたる歴風文化賞

年	回数	原 風 景	保 存 建 築 物	再生保存建築物	団 体
昭和59年	第1回	七財橋から見た金森倉庫の景観	相馬鋸社屋		北海道自然保護協会
60年	2回	連絡船のある風景	函館大町郵便局・日下部邸 大正湯	小林邸・川越電機商会	北海道函館華僑総会
61年	3回	電車の走る街	北海道船用品舗・白翁堂医院・ 小林文具店（旧小林写真館）・ 松原邸・医療法人社団高橋病院・ 函館文化服装学院	小形邸・ ロフトオブアート	学校法人遺愛学院
62年	4回	石垣のある街	永全寺・小熊邸・渡辺邸	高田屋嘉兵衛資料館 美容室（おしゃれ館）	函館市立青柳小学校（やぐるまの会）
63年	5回	町家と路地のある風景	永田邸・近江邸	手塚邸・北海道電子 計算センター	青函連絡船を守る会
平成元年	6回	鐘の鳴る丘	教育資料館（教育大学函館分校）	函館ヒストリープラザ BAYはこだて	函館ハリストス正教会
2年	7回	谷地頭風情	野口梅吉商店	金森美術館	市民創作「函館野外劇場」 の会
3年	8回	函館公園	浜岡邸・本田邸	平和石油	チンチン電車を走らせよう会
4年	9回	赤松街道（国道5号線）	奥島邸・永野邸・ひろ寿司	会席茶屋（うつ木）	元町倶楽部
5年	10回	五稜郭	本谷邸・菊谷邸・石田邸	生田ガラス館・函館	亀田川を美しくする会

◎歴風文化賞選考基準

1. 建物自体の貴重性。
2. 持ち主が長年保存への努力を続けている。
3. 景観への寄与。
4. 歴史性
5. 地域の町並みや社会全般へ波及効果が大きい。
6. 諸々の制約の中で創意工夫が顕著である。

この中には惜しまれつつも取りこわされたものがある。平成2年函館の原風景として宣言された「谷地頭風情」のランドマークとも言える谷地頭小学校が、昨、平成4年12月26日解体された。平成元年来、苦節の運動を続けられた富岡先生はじめ、同志の方々のご苦勞を心からねぎらいたい。この運動は函館の歴史に深く刻みこまれるであろう。

「れきふう会」に学ぶ ～チャリティパーティに参加して～

札幌建築鑑賞会スタッフ 杉浦 正人

札幌在住のため、日ころ歴風会の諸行事に参加できず「せめて年に1回ぐらいは」と、このたび初めてチャリティパーティに参加させていただいた。ホールを埋め尽くす参加者の熱気に触れ、町並みに寄せる人々の思いこそ函館の財産ではないかと肌で感じた。このパーティは、とかく行政主体の式典が妙に格式ばっている反面中身が無かったり、演出過剰が鼻についたりするのは異なっていたと思う。ユニークな「歴風文化賞」の授与式やチャリティオークションなど、市民主体の行事にふさわしく和気あいあいとした雰囲気印象に残っている。また、肩肘はった市民運動というイメージがないことも好感が持てた。参加してあらためて感じたのは、人々の「営み」と「愛着」を歴風会が大切にしていることだ。これは町並み保存運動という枠組みを超えた先駆的独自性とも言えるのではないか。

函館にとりたてて縁がなかった私がこの会に入会したきっかけは、3年前にさかのぼる。歴史の面影が町並みからいとも簡単に消し去られていくことに遅ればせながら疑問を持ち始め、「市民の一人として何かできないだろうか」と思っていたときのことだ。一人で訪れた私のために、歴風会の役員の方々が大挙して(?)お会いしてくださり温かく励ましてくださった。私は人々のもてなしの心を熱く感じ、たちまち函館が好きになった。

「学ぶ」とは、元来「まねぶ」すなわち「まねをすること」が語源であるという。私の活動は、模倣こそ創造の源であるという信念のもとで「歴風会」をまず「学ぶ」ことから始めた。半年後「歴史的な建物や町並みを見学しながら、わが街の再発見を」と呼びかけ、「札幌建築鑑賞会」として大小7回の行事を重ねるに至った。私を含むスタッフは、毎回数多くの市民が参加することと熱意・関心の高さにいつも驚いている。「今まで素通りしていた札幌の町並み・建造物にあらためて関心を持つようになりました」「無意識

に眺めていた町並みを意識して見るようになりました」という参加者の声がスタッフの原動力でもある。

もちろん、札幌と函館は同じ北海道にありながらも「歴史的風土」が異なり、同じことをあてはめるのは土台無理がある。とはいえ、歴史を街づくりに生かす試みはいわゆる「古都」と呼ばれる街の専売特許ではないし、新陳代謝の激しい近代都市・札幌だからこそ、歴史の痕跡を町並みの中にとどめてほしいと考えるのは私だけではなかろう。おそらく函館でも「本州と比べたらそれほど歴史の古いマチでもないのに」という声を乗り越えて「歴風会」は産声を上げたこと

だろう。記念すべき会報第1号を拝読していみじくも「対象地域の全国化・全道化」という発足理念に触れ、目からウロコが落ちる思いがしたものである。

建物などの保存に際し、人々の感傷や郷愁が保障とはなり難い事例は枚挙にいとまがない。しかし一方で、過去の遺産に市民が愛着を再注入することによって新たな価値が生み出されることも痛感する。札幌での活動は、直截的な保存＝「守る」運動とは次元が異なるし遠回りかもしれないが、

鑑賞という営為を通して市民の意識風土に愛着という種が播かれることを私は信じたい。最近の見学会で明治時代の北海道開拓使高官の旧邸を訪ね、参加者の感想とともに「皆さんの熱心さに私も励まされます」という持ち主の方の言葉を聞くと、私の願いはそれほど的外れでもないかと思う。語源をもう一つひもとくならば、「まもる」とは「目守る」すなわち「ものごとを見つめる」ことであるという。私は鑑賞の意味をあらためてかみしめている。

最後に、パーティの後「元町倶楽部」のMさんとYさんがご多用にもかかわらずお付き合くださったことに感謝を申し添えたい。明治館のカフェーで夜が更けるまで語り合ったことは、忘れえない思い出である。函館は会うごとに私の愛着を増してくれる。

チャリティー当日「町並み基金」として市へ50万円を寄付



写真 北海道新聞社提供

函館見学会を振り返って

小樽再生フォーラム代表 篠崎恒夫

函館に行こうよの声が出てから半年、とうとう見学会が実現した。今度の見学会、函館と小樽のまちなみグループの永い付き合いの中で生まれた。もう10数年前になるが、小樽で全国まちなみゼミを開催したとき、催しの後半は場所を移して函館が第2会場となり、参会者のバスを見送ったことを覚えている。また、かれこれ3年前になろうか、函館歴風会員が小樽を訪ねられて交換会を催した。その後、小樽フォーラム会員の中で、函館のまちづくりのあり方が何かと話題に上がっていて、一度行って現地を見たい気持ちが沸き上がってきた。皆の関心の中には、景観地区とマンション問題、旧茶屋邸、谷地頭小学校の保存問題の行方、旧北海道庁支庁庁舎炎上のその後といったまちなみ保存についてのものもあれば、会員数も多く、活動も多面的に活発であり、1991年には、ウォーターフロントサミットとナショナル・トラスト全国大会を相次いで成功させたその実力の程を学んでみたいという期待も半ばしてあった。

さて当日10がつ3日の土曜日、定刻10時小樽の街を後にした。バスの中の顔ぶれは、小樽再生フォーラム会員、まちなみ散歩見学会員の有志、小樽商大の結城ゼミの面々と多士済々。道中天気恵まれ、赤松街道の美しさに目を眩りながら函館に到着。最初の見学は、トラピスチヌ修道院から始まった。湯の川地区にあって宿に近いことから工藤事務局長のお奨め。例の修道院クッキーで有名なところ。玄関先までは入れるが、あとは聖女の戒律の場とあって中には入れず、資料館で生活の様子を紹介する写真などを眺めながら、彼女らの勤めを想像する。小半時間の見学の後、そこを後にし、ほぼ予定通り宿の湯の川荘につく。今夜は、歴風会の方々の夕食懇談会が楽しみ。会長の浜島さん、工藤事務局長をはじめ会員の皆様が忙しいなかお出下さっての顔合わせから始まる。函館のまちづくりの現状、歴風会の取り組みなどふだんサッと見て歩き旅にはないお話を伺うことが出来る。旧函館支庁庁舎保存からの歴風会の始まり、チャリティーパーティーの開催などで作った「文化財保全基金」の市への寄付など、やはり函館は年期が入っている感じ。宴席に移ると、歴風会からビール20本の差入れが待っていた。小樽から持参した地酒も結構好評。海の幸に舌鼓をうちながら歓談が続く。今夜の圧巻はなんとといっても歴風会進藤さんの江差追分。自家葉籠中のものとされた歌声に盛大な拍手が送られた。尽きぬ話に名残を惜しみつつ、次は、函館山の夜景がお待ちかね。工藤さんが案内に付いて下さる。晴れ渡った星空のもと、街の光も漁火もどこまでも透明で美しい。これはみんなのふだんの心がけの良さの賜。帰りの道すがら、ライトアップされた建物の一つ一つを工藤さんが説明して下さった。

明けて4日の日曜日。心がけの効き目も昨夜まで。なんと小雨が降っているのではないか。恨めしい思いを載せてバスは待ち合わせのケーブル駅へ。ここで夕べお出戴いた佐々木さん、藤田さん達と又お会いし、ご案内をお願いします。早速、三々五々のグループとなっ

て歩き始める。東本願寺別院のコンクリート作りの面白さ。ハリスト正教会の丘では、ここにマンションが立ったらとんでもないとの実感を誰しもが持つだろうとの感じ。旧公会堂では、なんと工藤さんのお骨入りで入場料はただ。有難い。実にしっかりした造りに感心し、ダゲレオタイプの写真機はいつ見ても歴史を感じさせるもんだといつまでも見入る。突然、鹿鳴館風の衣裳を付けた若者が飛び出してきた。何か映画のロケでもと思ったら、写真を撮るための貸衣裳とか。なかなか面白い企画で、函館市当局も結構懐が深いもんだと再び感心。同時に、よほど注意していないと失火の危険があるとの思いが一瞬頭をかすめた。旧函館支庁庁舎は復旧の最中でシートで覆われていた。復旧資金を作り出すために、又一企画打ち上げる予定とのお話を伺う。基坂では最近復旧になったばかりの旧イギリス領事館を右手にみながら中華会館へと向かう。電車通りの相馬株式会社も落ちついた建物。木造をよく持ちこたえさせてきたものだとその努力に頭が下がる。同じ通りでは、崩れかけた廃屋が人の目を引く。木造部分は、もはや使いのものにはなりそうも無いが、入口の石造りはどうして立派なもの。このまま放っておくのは勿体ない思いがする。海岸へ出ると、ヒストリープラザは、丁度青年会議所の全国大会とかで人人人。千葉さんのお知り合いの海辺のしゃれたレストランで、お昼をご馳走になる。ユニオンスクエアでレストランに入った連中は、前に来たときほど感激しなかったとか。

昼食後は、工藤さんの本拠地五稜郭へ。タワー搭乗も工藤さんに招待券を戴いてのただ。御本人から詳しい説明をして戴き、日本唯一の五角形城跡の眺めを満喫する。そこに掲げられた写真を見れば、なんと宮様がお出になっての説明役が工藤さん。恐れ入った次第。ここで、工藤さんを始め会員の方々とお別れをして、一路帰途に付く。このころになると、雨も上がり、晴れ間も見えてきた。バスの中は満足気なみんなの顔。充実した二日間。ただ残念なのは、副会長の田尻さんが、小樽に行かれてのすれ違い。峰山さんも同行できなかった。お二人が揃えば、より見学会の厚みも増しただろうにと一言。

終わりに、歴風会のみなさん、二日間にわたって本当にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。次第。
(小樽商科大学教授)



「れきふう」の道を辿って

小樽再生フォーラム運営委員 棟 徹 夫

私の家の二階の壁に、古いカレンダーの絵が貼ってある。原画の作者は一水会の金丸直衛氏で、サインの日付は1988年となっている。画題は「初夏の函館港と青函連絡船」とある。吹き上げる海風がじかに感じられるような青い湾内のほぼ中央に、白いケビンと橙色の船腹の鮮やかなコントラストを見せた連絡船が静かに進んでいる。光線の筆致から、昼さがりであろうか。ハッと息を呑むほどの函館のぬくもりと哀感を感じさせるシーンである。この絵の中心テーマである青函連絡船も今はなく、絵に画かれている港周辺のたゞすまいも変わってしまったに違いない。この絵も、歴史的景観の名残りなのかも知れない。

函館は、私にとっても知らない町ではなかった。叔父が旧制函館高等水産学校を卒業して、旧日魯漁業に入社し函館に住んでいたの、少年の頃は遊びに行くことがあり、叔父一家と共に、昔の五島軒で洋食をご馳走になったり、街灯やネオンが輝いていた嘗ての十字街や大門あたりをぶらついたこともあった。

函館はまた、私の青年期にベストセラーになった、石坂洋次郎の小説「若い人」の舞台のモデルと取沙汰された旧函館遺愛高等女学校のある町としても、印象に残るものがあった。

私が函館歴風会を知るきっかけは、小樽再生フォーラムが、歴風会との交流を兼ねて函館の町並み見学会を実施することになった時である。歴風会の名を知った時、強いインパクトを受けたことが一つある。それは、この会は歴史的景観や町並みではなくて、「風土」を守ると言い切っている点である。私は昔、和辻哲郎の「風土」を読んだ時、風土の意味する自然と人間との歴史的息づきの、底知れない重さに打ちひしがれる思いがしたが、歴風会の皆さんが、その重みを現在の視点に立ったコンセプトとして踏まえた、そのアイデンティティーの確かさに、胸が熱くなった。是非見学会に参加し、その道を辿りお話をお聞きしたいと切に思った。

私は長らく北見工業大学に在職し、1987年定年退官して生まれ故郷の小樽に戻って来たが、当時小樽再生フォーラムのことは全く知らなかった。北見時代、私なりの故郷小樽に対する強い愛着心から、小樽の町の在り様には関心を抱いていたので、小樽運河の保存運動が広まるにつれ、私も賛同のアピールに加わったり、カンパを拠金したりした。私が再生フォーラムの会員になったのは、全くの偶然のきっかけからであり、

メンバーの多くが運河保存運動の歴史を背負った人達であることを知って、何やら運命のあやつり糸にからまれたような気がしないでもなかった。

運命のあやつり糸が私と歴風会にもからまっているのを知ったのは、函館にお邪魔した夜の交流懇親会の宴の席であった。席に着いて、斜め左前の美しいご婦人と私の目が合った瞬間、そのご婦人の表情が一瞬躍動し、「あらっ、棟先生でないですか。私北見に居た藤田です。」と叫んだ。面喰うと同時に30年近い昔の想いが、どっと噴き出した。目の前のご婦人は、北見工大の同僚でその後函館高専に移られ（現在函館大学在職）た藤田徹先生の奥様であった。奇遇も奇遇、運命の赤い糸のからみにお互いは驚きっぱなし。奥様は歴風会最初からのメンバーで、事務局の仕事を担当され、町造り運動の大先輩であることを知って、私の驚きは増幅するばかりだった。

町造りのムーブメントは、函館で更に鼓動を高めていた。と言うのは、私の学問上の知友でもある富岡由夫先生（函館高専名誉教授）が、旧谷地頭小学校校舎の保存活用をすすめる市民運動の先頭切って行動されているからだ。函館に着いて早速お電話し、ここでもお互いの奇しき巡り合わせを確かめ合ったのである。藤田郁さんも富岡先生も、そして私も理工系の雰囲気なかで日々を過ごして来た者達が、こうした事に一本の糸で結ばれている人生のパラドックスを知る思いがした。絶句する程の素晴らしいさであったし、生憎の雨の二日目の町並み散歩も、かえってしっとりした情感をそそるものになったものと思っている。歴風の風は「かぜ」とも読める。まさに「歴史的な風」なのである。歴風会の会報の題字も、巧みに力強く、しかも流麗に「かぜ」の流れを表現しているようだ。古い風を呼び覚まして新しい風として吹き上げる、そこに私は函館歴風会の真髄を見る。「れきふう」の道を辿った二日間の旅は、私にとって、近来にない味わい深く、胸に灯をともしてくれるものであった。歴風会の皆様方のご好意に対し、心から感謝を捧げたい。拙い歌を記して結びとする。

神の撒（ま）きしジュエリーならん声無くて
いのち騰（たか）ぶる函館の夜景（よる）
小雨降る元町あたり石だたみページュの壁に
くぐもりし音
懐かしき電車遺（のこ）れる函館にチリン
チリンと想いこぼる



昭和五三年（一九七八）歴風会発足以来、
である工藤光雄氏が、平成四年（一九九二）
会賞献賞（自治功労者）を受賞しました。
心よりお祝い申し上げます。
事務局長
北海道社

チャリティーパーティーに御協力商社（順不同）
棒二森谷・今井・函館西部・函館ダイエー
魚長食品・函館山ロープウェイ・イトーヨー
カドー・長崎屋・函館魚市場・五稜郭タワー
第一食品・さいか・サッポロウエシマコーヒ
ー・文雅堂・カメラのたねざわ・太田比古象
おしゃれ館・ユニークショップつしま・五島
軒・かもめの水兵さん・平方亮三・割烹中井
テオー小笠原・アララット・BAYはこだ
て・函館ビヤホール・花ホテル・はこだてわ
いん・不二屋本店・マルミヤ宮下商店・三和
印刷・小田島水産食品・カネマル・ウシオ・
昭和製菓・末広堂・カメラのニセコ・函館・
マルショウ食品、生田ガラス館の諸氏
（ありがとうございます。）

事務局だより

☆10月24日（土）南北海道文化会議92が、函館市公
民館で開催されました。テーマは“伝統的文化財
を生かそう”基調講演“市民が支えた赤れんが郷
土館”講師元秋田市文化会館館長佐藤夙先生、討
論会は“伝統的文化財を生かそう”パネラーに、
評論家竹岡和田夫氏他三方が夫々発言され、内容
の濃い会議でした。当会から多数出席しました。

☆11月14日（土）はこだて景観ウォッチング&フォ
ーラムが函館市市民会館で開催（主催：北海道渡島
支庁・函館市）午前景観ウォッチング、午後景観
フォーラム、基調講演“いま、都市の景観を考
える”講師(旬)中井建築研究所環境デザイン室長中井
和子氏、パネルディスカッション“函館の都市景
観と市民”活発な討論がなされ大変有意義でした。
当会から浜島会長外4名が出席しました。

☆11月18日（水）第31回市民文化交換のつどい（主
催：函館市教育委員会・函館市文化団体協議会）
が、函館ハーバービューホテルで開催されました。
平成4年函館市文化賞受賞者の紹介、平成4年度
函館市文化団体協議会白鳳賞と青麒麟賞が夫々授与
され、受賞者代表吉田有里氏の挨拶の後、懇談に
入り盛会裡に終了。当会から浜島会長、工藤事務
局長が出席しました。

☆11月19日（木）国際ソロプチミスト函館主催の、
“チャリティー秋の夕べ”が国際ホテルで開催され
その益金を旧北海道庁函館支庁庁舎の復元にと金
30万円を当会に寄贈されました。当日会場におい
て贈呈式が行われるに当たり浜島会長・工藤事
務局長がお招きを受け出席いたしました。

☆11月21日（土）“西部地区の町並み保存と旧谷地
頭小の問題点を探るシンポジウム”（主催：旧谷
地頭小学校校舎の保存活用をすすめる会）が函館
市教育会館で開催されました。越野武氏（北大教
授）の基調講演のあと、パネルディスカッション
があり、活発な討論がなされました。当会々員も
多数参加いたしました。

☆11月25日（水）第5回“ストーブの日”火入れ式
が箱館高田屋嘉兵衛資料館で行われました。安政
3年に箱館で造られた日本初のストーブを昭和63
年11月に市民の手によって復元し、11月25日を“
ストーブの日”と定め先人の遺徳を偲び貴重な遺
産の伝承と顕彰をしております。浜島会長・工藤
事務局長が出席しました。

☆12月24日（木）はこだてFM放送局（愛称「FM
いるか」）80.7MHz、が日本で一番新しいFMラジオ
局として12月24日12時開局放送を開始しました。
全国に先駆けて函館市がコミュニティFM放送指
定地として郵政省より告示をされたのを受け、函
館山ロープウェイ株式会社が放送局設置の認可を
受け、国内第一号のコミュニティ放送を実施した
ものであります。函館の文化活動に大きく寄与さ
れるものと期待されるところであります。当日の
開局のご案内をいただいたので工藤事務局長が
出席いたしました。

☆1月20日（水）平成5年函館市文化団体協議会新
年交礼会が五島軒本店で開催、工藤事務局長、佐
々木正子・加賀谷京子運営委員が出席しました。

☆2月12日（金）第15回函館の町並みを美しくする
新春チャリティーパーティーを五島軒本店で開催、
300余名の市民のご参加を得て盛況裡に終了し
ました。この席上、歴史的町並み基金として金50
万円を市へ寄付いたしました。佐々木祐二実行委
員長、工藤恵美副実行委員長、実行委員の皆様ご
苦勞様でした。この催しに物品の提供をいただき
ました商社に厚くお礼申し上げます。

☆2月27日（土）～3月5日（金）西部地区の歴史
的な町並み写真展をNHK函館放送局ギャラリー
で開催。展示内容は、西部地区の代表的な歴史的
建築物、景観賞受賞作品、石畳みの整備など（主
催：歴風会・函館市）

編集後記

ご多忙のところ、玉稿をお寄せ下さり深謝申しあ
げます。
（田尻）